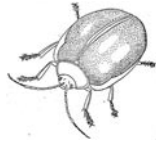


たんぽう



兵庫県佐用町昆虫館のミヤマホソハナカミキリ

三木 進

はじめに

ミヤマホソハナカミキリ *Idiostrogalia contracta* は、兵庫県内では、山地に分布し、初夏から盛夏までノリウツギや日陰のショウマなどから採集される。信州などと違って、まとまって採れることはあまりないが、今回、佐用町昆虫館の壁に飛来する複数個体を観察したので報告する。

観察状況

2011年7月8日、午後3時ごろ、佐用郡佐用町船越、佐用町昆虫館の館西側の壁面に、複数の本種がとまっているのを見つけ採集した。高さは、2~2.5mの範囲が中心。さらに同4時半ぐらいまでに、何度か見回り本種を確認、壁にとまっているか、壁のそばを素早く飛翔中の個体を採集した。合計、4♂4♀であった。



図1 ミヤマホソハナカミキリ♀。

本種を昆虫館ではじめて確認したのは、前年2010年6月12日の午後4時過ぎ。館内に紛れ込んだ個体をNPO法人こどもとむしの会会員の金子留美子氏が採集し、譲り受けた。続いて6月19日の夕刻、館の東側に飛来した個体を筆者が採集した。いずれも♀であった。

同年、館東側の壁には、午後から夕刻にかけて、ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* やイッシキキモンカミキリ *Glenea centroguttata*、シラホシカミキリ *Glenea relicta* など飛来した。

2011年も、午後3時以降、注意して見ていると、まず7月3日に1♂が西側壁面で採れ、8日の確認となった。

考察

なぜ、壁に集まるのか。ミヤマホソハナカミキリが

花粉を食べに集まるのは、上記のショウマなどの他にゴトウヅルが知られるが、付近にはない。ホストはタンナサワフタギ、サワフタギにモミ、ツガだという。数m離れたところに高さ2mほどのサワフタギが2本あるが、枯れた枝や根はない。これに対し、館西側の山は、戦前まで全山、モミで覆われていたという。現在も、数本のモミの大木が残っており、対岸にも一本直立している。これらがホストになっている可能性が高いと考えられる。

一方、飛来個体は、雌雄同数だが、交尾個体はなかった。メスの飛来による誘因とは考えにくい。そして、とまっている場所は、軒のすぐ下の壁面が7割だった。また、新鮮なものもいたが、触覚や脚がなくなっている個体もあった。

これらから、日陰を好む本種は、日中は、館西側のモミが生えている鬱蒼とした森に潜んでいて、配偶行動等の活動時間帯になって、一斉に開けた館側に飛来。通常あまり高く飛ばず、軒と壁とがトラップとなって、複数個体が集まったとするのが最も妥当だと考える。

さらに、屋外倉庫から川下、西壁の南側三分一の区間と、通路近くに限っていた。この点に関しては、本種は昆虫館を挟んだ西から東への移動に当たり、館の屋根を超えるものもあるが、主に壁に沿って移動し、人間同様に、東西につながる通路を利用していると考えられる。

なお、館敷地内での本種は「きべりはむし第33巻第2号に、2010年・マレーゼトラップにより2頭の記録がある(藤江ほか, 2011)。時期も6月19日から7月10日で佐用町昆虫館では、6月中旬から7月上旬が本種の発生のピークと推察される。

今後も、本種を観察していきたい。同じような経験をされた方は、情報を寄せていただきたい。さらに、誘引物質、要素等、別の解釈があれば、ご教示願いたい。

なお、壁面に複数個体が飛来した写真を撮ったが、保存データをPCごと壊してしまい、標本写真で報告する。

参考文献

- 小島圭三・中村慎吾, 2011. 日本産カミキリムシ食樹総目録(改訂増補版), 比婆科学教育振興会
- 大林延夫・新里達也, 2007. 日本産カミキリムシ, 東海大学出版会
- 藤江隼平・吉田浩史・安達誠文・吉田貴大・旭和也・藤原淳一・安岡拓郎, 2011. 佐用町昆虫館周辺の昆虫相-マレーゼトラップで得られた甲虫目, 膜翅目, 双翅目およびライトトラップで得られた鱗翅目の昆虫について-. きべりはむし, 33(2): 4-20.

(Susumu MIKI 兵庫県明石市)